



No.51

2001年3月発行

新潟県支部報

マイ スコープ

愛すべきハクチョウの行動

新潟市 吉岡勝雄

秋冷を感じる頃になると、私の心は湖沼に憧れる。北からの賓客があるからである。そのなかでも、ハクチョウとヒシクイが代表格であると思っているが、とりわけハクチョウのその大型で真白な姿は、冬の女王の風格を十分に備えていると言える。鳥に興味を持って以来、観察鳥種数の増加を目指してきたが、佐潟湿地センターとの関わりができた。来館者のお目当ては、殆どがハクチョウで、ハクチョウに関する質問が多いので、以前とは異なった視点からハクチョウを見るようになった。オオハクチョウもコハクチョウも行動に大差はなく、スコープの中で様々な姿を私に見せてくれ、いつしか、その眩しさに、目を細めながら見つめるようになった。

何と言っても舞い立ちが圧巻で、水面を蹴って数十メートル助走して風上に飛び立っていく。

着水は羽を広げて足を前に出し、制動をかける。首の上げ下ろしは、家族や仲間への志の伝達や挨拶であるらしい。ハクチョウは夫婦の絆が強く、数羽の幼鳥からなる家族単位で行動しているが、飛び立つときは、首の下げ下ろしが一斉に揃ったとき、行われる。なかなかユーモラスで人が知人と挨拶しているようである。頭を水中に突っ込んでの逆立ちは採餌であるが、女王の優雅な姿とはうってかわって、おもしろい。羽づくろいは、油脂腺からの油をくちばしで、ていねいに羽毛や

羽に塗る。このときは満腹のようで、背伸びをしたり、羽を伸ばしたり、足を伸ばしたり、ときには欠伸をする個体もある。休息は長い首を後ろに曲げ、頭を背の羽に入れていることが多い。降雪時は体に雪をのせている個体もいるが、餌の確保も不可能との判断から、眠ったままで、エネルギーの消耗を防いでいる。飛び立ちや着水、侵入者を追い払ったときなど、羽を広げて体を反らし、コォと声を上げる。相手を追いかけ、くちばしで噛みつくこともする。警戒するときは、首をいっぱい伸ばし、周辺の様子をうかがっている。自然の摂理とはいえ、毎年自然死を見てきた。水辺から引きあげたこともあった。

数日前から群から離れ、生彩を欠く個体があった。自らの死を見せたくないのかあし刃近くでこと切れていた。これ等のハクチョウも、瀕死の状態最後の美しいスワンソングを発して絶命したのだろうかと心が痛む。このように、人の行動とハクチョウのそれを重ねあわせて、ハクチョウを見つめている。



クマタカの「重なり飛行」観察記録

西蒲原郡湯東村 岡田成弘

新潟県下越・蒲原地方の山地でクマタカを観察中に、求愛・誇示と思われる行動を監察したので報告します。

観察日時：1999年11月22日

天候：快晴

13：10 谷あいから紅葉した山々を観察していると東側の稜線沿いに1羽のクマタカが出現し、しばらく帆翔・旋回を繰り返していた。

13：12 突然急降下を始めたところ、北側からもう1羽が出現した。2羽は徐々に接近し(図1、2)、翼を広げたまま2羽が重なったようになり(図3)、約7～8秒重なった状態で飛行を続けた(図4)。

いったん離れ(図5)、2羽で距離をおきながら飛行した(図6～8)。

しばらくして、再び距離を縮め重なり飛行を行った。数秒後離れると2羽で飛び、帆翔しながら徐々に降下し(図9、10)、帆翔を繰り返していた稜線の紅葉した林の中に入った。

その後4時までの観察の間、1羽が時折出現した稜線に沿って飛んだが、重なり飛行は見られなかった。

重なり飛行をした時に2羽の大きさに差があることが認められた。大きさの違いから上になった小型の個体がオス、下になった大型個体がメスではないかと推測され、2羽はつがいの可能性が高いと思われる。



図2



図3



図4

飯田知彦他によれば、重なり飛行は「飛行中のメスにオスが後方から接近し、オスはメスの上に重なった状態の飛行が数秒続くものである。」と述べられており、今回の観察例と合致する。

また、「基本的な誇示行動のうちのひとつと思われる。これまで記録されたものは、いず



図1

れも営巣地の近辺のみであるが、範囲は比較的広い。時期的には、多くの造巣期に行われ



図5



図6



図7

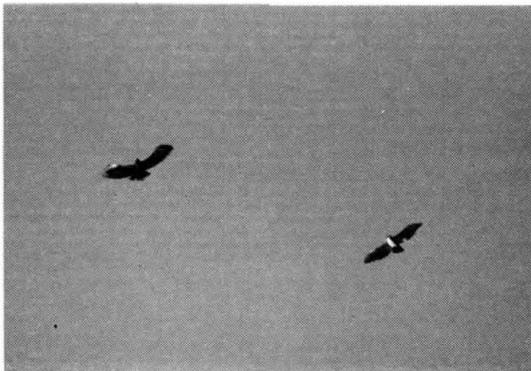


図8

るが、繁殖期の育雛期の記録もあるため、この誇示行動は、主に次の繁殖に関係したものではなく、基本的な、つがいのきずなを深める意味が強いと思われる。」とある。このことから今回の行動は、繁殖期の求愛・誇示行動のひとつと考える事ができると思う。この谷ではこれまでほぼ周年にわたってクマタカが観察されており、今後繁殖の確認を含め調査・観察を続けていきたいと思う。また貴重な情報をご提供下さった佐藤吟一氏、山谷裕子氏に厚く御礼申し上げます。



図9

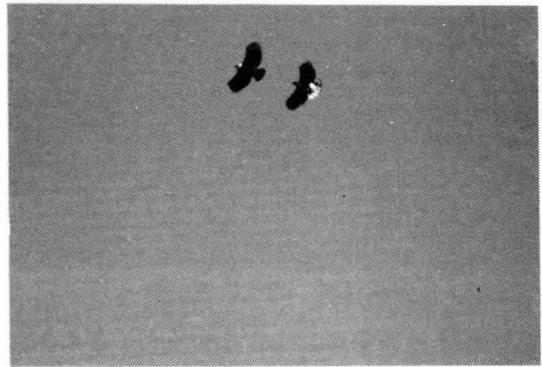


図10

引用文献：飯田知彦・森本栄・前西聡・今出政明・近末訓（1998）「クマタカの誇示行動とその生態的意味」クマタカの生態2:6-21 広島クマタカ生態研究会

参考文献：森岡照明・叶内拓哉・山形則夫・川田隆（1995）図鑑 日本のワシタカ類・631PP.文一総合出版、

鳥渡る・旅する私

新津市 渡辺 範雄

平成12年秋の事、行事が続くので10月20日は標識調査をやろうと決め、早朝近くの能代川左岸河川敷に出向いた。網は2枚使って作業にかかり1時間おき4回目の見回りの時であった。網にかかった2羽のアオジの1つに始めて目にする足環の刻印Rus.Vlad.に気付いた。本物かという不安を感じた。後日山階研究所吉安さんからVlad.はウラジオストックと教えられた。足環番号、計測値を所定用紙に記帳し、回収鳥を袋に入れ家へ戻ってポジ撮影を行い別のカメラをもって調査地に引返した。河川敷の風景と回収鳥のネガ撮影をすませ、長旅の無事を祈りながら放鳥をすませた。この回収鳥が1ヶ月前サハリンで標識放鳥したことが判明した時、驚きと幸せで一杯であった。



回収場所 能代川河川敷

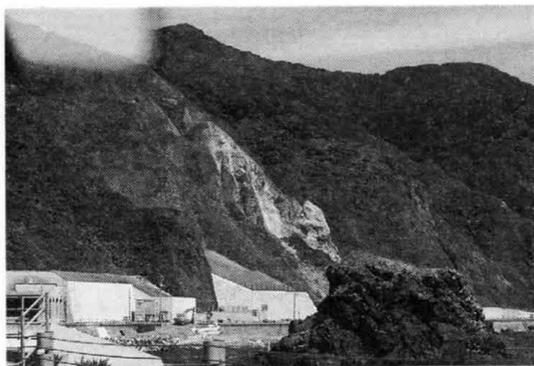
福島潟で

5月末バンダー仲間の南雲さんから電話があった。「福島STで標識調査を続けている。私用で3日間不在にする。尾崎調査室長だけとなるので応援を」の依頼だった。「6月3～5日承知」の返事をして当日正午過ぎ豊栄駅で出迎えをうけ福島潟STで引継をすませた。私だけでは心許ないと話を聞いて小松先輩が飯塚さんの車で遅れて到着。尾崎さんを囲んで賑やかな会食を共にした。泊まりこみ作業中に「観察した通り正しく記帳することだ」と強く言われたことがその後も長く頭に残った。

標識大会で北海道

8月北海道松前町で開催の標識協会大会に小松さんと参加することがあった。船で小樽へ、JR線札幌経由で函館に着いた。予定より早いので五稜郭史跡を見学して駅に戻った。迎えの人には会えず時は過ぎてゆく。困惑して事務局宅へ電話をかけたら通じ、指示を受けた。「海峡線で木古内へ来れば迎えの車が待つ」という奥さんの電話。5分後列車に乗り込む危ない所だった。迎えの車に乗車し、福島町を過ぎ会場に着いたのが4時すぎ、小樽上陸から12時間後の事である。北海道の人々の暖かい心は忘れることが出来ない。

会議が済むと宿へ移動し懇親会が始まった。地元土木建築・電気業者代表者への感謝状の贈呈があり、ついで観察小屋落成の裏話と続いて一際高く拍手の音が響いた。宴の終わる頃翌朝の調査の準備に小屋へ行く希望者が募られ、小松さんと共に同行することになった。海岸路を走り、やがて急坂を上り山の中腹に着いた。「啼星小屋」と記された看板の建屋があった。奥のほうはベッドが設けられた休養室、中央は照明の完備した作業室、飲料水は運びこむという。小屋の命名者は山階鳥研北海道担当の佐藤さん。「星空を眺めていると渡ってゆく鳥の声が聞こえてくる」と、傍らで静かに話っていた。作業がすんで海側松林の間



松前町に近い海岸道路

から私は竜飛岬の方角を探した。灯台の灯が点滅していた。真黒な海上にはイカ釣船の灯火が一線に並び、右手下海岸沿いには町の家への灯が続いていた。季節に応じて北から南から渡る鳥の往来を想像しながら時を過ごした。

札幌大会で再び

鳥学会北海道大会が北大で9月15日から3日間開催となった。大会で発表する千葉さんと同行し、小松さんと再度北海道を訪ねることになった。3日間教室に通って聴講した。北大附属植物園の見学と野幌森林公園・北海道開拓記念館の見学を除けばのこと。

3日目の午後構内を去る時理学部前庭の「人工雪誕生の地記念碑」を前にして中谷宇吉郎の偉業を偲んでいた。

地元バンダー仲間3人に案内され、2台の車で北へ向かった。1時間半後、石狩川左岸の河川敷にある広川さんの標識調査ステーションに案内された。泊り可能な施設も設けてあった。広大なアシ原の中に、遙か先へ続いている網場を歩いてみて、初めて標識調査の拠点の重要性と、維持管理する労と資の困難さ、学問への熱意には頭が下がる思いがした。立派な調査結果を発表されており見習うことは随分沢山あった。

更に場所を移動して他の数ヶ所を案内されたが、16時を過ぎる頃から雨に降られしまった。雨の中、札幌駅に近いホテルまで送って頂きお別れをしたが、心温まる案内にはただ



石狩川河川敷のショウドウツバメの巣穴

ただ感謝の気持ちでいっぱいだった。

回収鳥のその後

10月30日になって富山市の湯浅さんから意外な知らせがあった。「富山県とウラジオストク極東支部との共同調査が3年目に入っている。新潟県で回収鳥の報告があったことを山階研究所から知らされ始めての回収で喜んでいる。回収場所の状況、写真等富山県自然保護課宛に届けて戴きたい」。11月6日に保護課の武田さんから丁寧な礼状が届いた。共同調査の内容、H10年から放鳥地、放鳥数、種別、報道新聞記事、沿岸州を含む地図を添えた返事を戴き感激している。又尾崎室長からウラジオからの回収報告書が送られて来たものを記載したのが届けられた。旅を共にした小松さん千葉さんからも感激のお便りをいただいた。併せてお世話になった北海道の仲間、鳥研の尾崎室長、吉安さんにも感謝をしている。



6kmという北大構内大通り

回 収 鳥	アオジ
リ ン グ 番 号	Rus.Vlad.C-16858
捕 獲 放 鳥 地	ロシア、サハリン州、 ドリンスキイ地区
捕 獲 放 鳥 者	ロシア科学アカデミー研究員
コ ー ド	47° 27'N, 142° 40'E
放 鳥 日	H12.9.20
捕 獲 回 収 地	新津市、能代川河川敷
コ ー ド	37° 47'N, 139° 09'E
回 収 放 鳥 日	H12.10.20
放 鳥 地 - 回 収 地	約110km

山本山でのワシタカ探鳥会

長岡市 末崎 朗

2000年9月17日日曜日、小千谷市山本山は朝からあいにくの小雨だった。毎年のことだが、天候のよいタイミングに合わせて探鳥会を開くのは難しい。冬のガンカモやカモメの観察なら多少の荒天でもよいのだが、ワシタカの渡りの場合は観察数が激減する。それでも晴れ間をついてワシタカが渡ることもある。小千谷市のその日の天候は遠くから来られる方にはなかなかわからない。かくして肌寒いような天気でも奇跡を信じる？人々が毎年探鳥会に参加される。探鳥会の担当幹事としては非常に申し訳ない気分になる。

そんな幹事のつらい気持ちを推し量ってくれたのか今回の探鳥会にはちょっとした珍鳥が姿を見せてくれた。探鳥会が始まってまもなく、信濃川を望んで左側の林からパタパタ飛び上がった一羽のタカが、上昇気流に乗れなかったのか右手のスギ木立の頂きに止まった。普通のサシバかなと思いながらあまり気にしていなかったのだが、スコープに入れてびっくり。図鑑に書いてあるとおりのきれいな暗色型のサシバであった。嘴、虹彩、脚の黄色部がなければとてもサシバには見えない。「図鑑日本のワシタカ類」(文一総合出版)によれば暗色型は1,000羽に1羽ぐらいの割合ではないかとのことであるが、私はこれまで見たことがなかった。上昇気流がなかったのが幸いしてか1時間近くそのスギの梢に止まり続けてくれた。おかげで探鳥会に参加したほとんどの人がその姿を見ることができた。「天候が悪くてもこんなこともあるさ」と少しはほっとできた。

しかし、天候はいっこうによくならない。タカはなかなか飛ばず、みんなそれぞれ鶺鴒の目鷹の目の状態でタカだけでなく鳥を探した。そんな状態の中、さらに別の意味で幹事泣かせの出来事が！一羽の正体不明のワシタカが遠くの杉の木にどこからか飛んできて止まっ

た。距離は200~300mもあつたらうか、やや遠いがスコープにはハッキリととらえることができた。けれどもやはりこの鳥も私は見たことがなかった。喉は白、腹は茶褐色、脚を覆う脛毛は白っぽく、翼も茶褐色の部分が多いが、その模様は言い表すことができない。誰もが大型のワシタカであることで一致したのだが、ベテランの皆さんの意見はバラバラ。イヌワシ、ハチクマ、カタシロワシ等々。しばらくするとその鳥はスギの木から下に飛んでいったため飛翔パターンもよくは見えず、結局不明種のままであった。幹事としては単に図鑑に記載されている種と比較するよりは、冷静に模様のパターンや体の各部のバランスを記述して、後で詳しく調べる姿勢が必要であったと反省している。

結局9時から始めた探鳥会で観察されたワシタカは12時までの間でハイタカ1、サシバ4、不明種1だけ。他に観察された鳥は18種で、計21種の鳥が観察されたという結果だった。幹事としては渡り途中の小鳥類、シジュウカラ、ヤマガラ、メジロ、イカルなどの姿もみんなじっくりと見ていただきたかったが、これらの鳥達は一瞬姿を見せてはすぐ飛び去ってしまうので他の探鳥会と同じような訳にはいかなかった。

参加した18名の皆さんには満足いかない内容であったと思うが、暗色型のサシバの例もあり、いつ何が出現するかはわからない。これに懲りずに来年以降もぜひ参加していただきたいと願っている。



暗色型のサシバ 撮影 黒島善助氏

小春日和の朝日池

上越市 小股 智文

昨年11月23日の探鳥会は、早朝より良い天候となり、放射冷却の為とても寒い中、探鳥会の始まる前から池に来てガンやヒシクイ達の飛び立ちを観察されていた方が、何人かいらっしゃいました。

探鳥会は、9時に挨拶と説明が始まりました。今回は、くびき野市民活動フェスタというNPOの活動の一環で、探鳥会をサポートする事になりました。会員外の一般の方が13名前後（子供含む）と日本野鳥の会県支部と上越地区探鳥の会との合同で行われました。10時頃の人数は63名位とかなりの参加者になりました。個人的には、もう少し会員外の一般の方が多く参加してくだされば、もっと良かったのと思いました。

観察を始めた頃は、マガン・ヒシクイ達はえさを食べに田んぼに入ってしまったて、ほとんどおらず、右側遠くにコハクチョウ、中央寄りにマガモ、カルガモ、ホシハジロ、カンムリカイツブリ、カワウなどが観察できました。



10時を過ぎる頃になると、マガン・ヒシクイ達が、ぞくぞくと戻り始めました。初めて探鳥会に来られた方々は、空いっぱいに広がった雁行を見上げて「すごいね。たくさんいるね。」等とスケールのある景色を楽しんでいる様子でした。

私自身も、ガン・ヒシクイ達が列を組み飛んでいる様子を見るのが大好きです。それも特に早朝、うす暗い静寂で時おりカモの声が聞こえる景色の中、池の奥の方からこちらの



岸へ向かって、「ギシギシ」とでも表現できましようか？ あの独特な羽音を立てて、頭の上を飛んで行く姿はとても雄大で、何とも言えない感動を覚えます。まだ一度も見た事がない方は、一度ご覧頂けたらと思います。蛇足ですが、その日の天候、風向き、鳥たちの気まぐれ等により、頭の上を必ず飛んでくれるとは限りません。何回かチャレンジして見て下さい。

今回初めて探鳥会に来られた子供連れの方々に、スコープで鳥達を見せて差し上げました。コハクチョウ、オオヒシクイ、マガモ、ダイサギ、カワウ、ホシハジロ等と数はあまり多くはありませんでしたが、鳥の違いや表情、動きなどを見てもらえて良かったと思います。代わる代わるスコープを覗いて、「色がきれい、動きがかわいい」等と言って喜んでもらえました。風もほとんどなく、陽が当たり暖かくとても観察しやすい良い一日となりました。

また毎年やって来るオジロワシが22日夕方か23日早朝にやって来たようだという情報もあり、(まだ私は今シーズン見ておらず)今度は、オジロワシの雄姿を見に朝日池に行こうと思います。

鳥合わせの後、保護部長の山本明さんから、朝日池の周辺整備についてお話しがございました。個人的には朝日池、鶴ノ池周辺は手を加えずいままで通り、自然のまま残して置いて欲しいと思います。さらにその辺のレジャーとの共存、または規制なども考えていかなければならないと思います。

今まで鳥を観察した事がない方々にも、鳥達を見てもらい自然の雄大さ、すばらしさをもっと知ってもらえたらと思います。

初めての探鳥会 (H13.2.4 寺泊港)

中蒲原郡小須戸町 白井 智雄

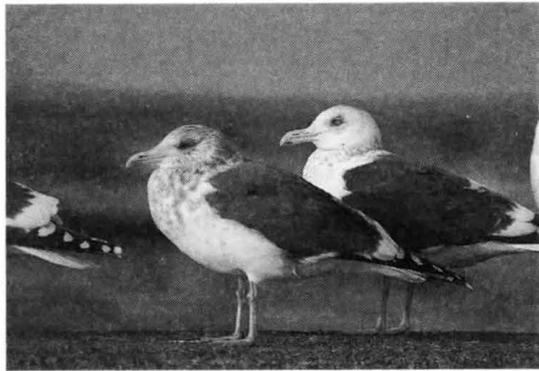
平成12年12月に入会させて頂き、今回が初めての参加となりました。

待ちに待った探鳥会の案内状が届いてから、さっそく日本野鳥の会のホームページを拝見。そこでカモメ類の識別ポイントなどインスタント知識を詰め込み、現地へ勇んで下見に出かけたところ、たしか…荒れた日ほど港に集まる…はずなのに、その日は残念ながらカモメとウミウを数羽確認できただけに留まりました。

ところが探鳥会当日、同じ場所で気象条件もほぼ同じなのに不思議なものです。指導部の方が大きな声で「ウミアイサが〇〇に、防波堤の手前にはカモが、△△にカンムリが」と教えて下さるその方向を眺めてみると、確かに水鳥の群が！妻がディスカウントショップで買ってくれたおもちゃのような双眼鏡でもハッキリと見えました。

ウミアイサやカンムリカイツブリをこの目で生まれて初めて見る事ができたその感動。嬉しくて海から吹きつける強い風も興奮をいくらか静めてくれこそすれ、寒さなど微塵も感じませんでした。一通り港の中を見渡しただけで鳥達を見つける早業に、さすがに指導部の方の凄腕と感嘆いたしました。

さらに出雲崎からの帰路、当地ではなかなかお目に掛かれないというシノリガモを見ることができたのも幸運でした。同乗させて頂



いた皆さんは超ベテラン揃い。走行中に突然ブレーキが掛かり、「何かいたみたい」という地点までバックした時、テトラポットの切れ目に小型の黒いカモ一羽を確認しました。一同目を凝らして観察を続けていると、それがしきりに潜って餌を獲っている様子が窺えます。再確認しようと全員が車外に出てフィールドスコープを固定。助手席に座っていらした支部長曰く「シノリガモではないか」とのこと。体全体が黒っぽく目の周りと後頭部に丸く白い部分がある特徴からそう判断されたようです。私はフィールドスコープを覗くのは初めて。つやがあり、配色がとてもきれいで印象的でした。

一大発見をしたあとの何とも表現し難い満ち足りた気分が包まれたまま、集合場所の「はまなす」に到着。すると辺りには食欲をそそるいい匂いが漂い、どんぶりにたら汁が用意されておりました。さっそくネギをたっぷり入れ熱々を頬張るとその美味しいこと！二杯もおかわりさせていただきました。今度はビール持参で来よう…。

空腹が満たされたその後は、今日見かけた鳥の種別の確認が行われました。ここでも皆さんのご報告を聞いたたびにビックリ。「えっ、そこにそんな鳥がいたの？」と感嘆させられることばかりでした。どうして皆さんの目にだけそんなにさまざまな野鳥が映るのでしょう。参加された方々の知識経験の豊富さに恐れ入ると同時に、私も早くそうなりたいと、今後の活動がますます楽しみになりました。



平成12年度研究発表会

編集部

平成12年11月5日(日)に県立自然科学館で新潟県支部の研究発表会が開催されました。ここでは当日の様子を報告したいと思います。今回の発表は県支部の研究部長の小池重人氏、指導部長の伊藤浩氏、野鳥写真家の叶内拓哉氏の3人でした。

小池重人氏は「鳥屋野潟で観察される水辺



研究発表を行う小池 重人氏

の鳥の生態」という題でプロジェクターを使った発表を行いました。主に鳥屋野潟の四季の移ろいの中でのコハクチョウとオオヨシキリの話でした。コハクチョウについては、鳥屋野潟のコハクチョウのねぐらとしての役割やオオハクチョウと異なり、家族グループの群れの中に当年以前の幼鳥を含むことなどを述べました。またオオヨシキリについては、春にテリトリー調査を行った結果から鳥屋野潟では6月上旬になわばりの数がピークになることや時期ごとの渡来個体数の変化は、一度最大に増加した後に減少し、再び増加するという二峰型を示すという話でした。この個体数変化については小池氏が長年観察を続けているコムドリでも同じ二峰型が見られるとのことでした。コムドリの場合、最初の山は成鳥の渡来を、次の山は若鳥の渡来が増える事を示し、オオヨシキリとの比較において興味深い点だという発表でした。

伊藤浩氏は「冬季中越地方海岸部で観察される海鳥について」という題で、新潟県支部で続けてきた寺泊探鳥会のデータを基にスライドを用いて発表を行いました。寺泊探鳥会は1979年から現在まで20年以上に渡って毎年2月に開催されてきました。今回の発表では1979年から1999年までのデータについて述べました。この間に合計77種が記録されました。よく観察されるのはハジロカイツブリ、カンムリカイツブリ、ウミウ、マガモ、カルガモ、ウミアイサ等カイツブリ類やカモ類で、ユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、カモメ、ウミネコなどカモメ類がみられるとのことでした。また、ヒメウ、クロガモ、ビロードキンクロの観察例が近年少なくなり、ウミウの数も減っているようだとの指摘があ



研究発表を行う伊藤 浩氏

りました。寺泊探鳥会は寺泊から出雲崎までの間を移動しながらの探鳥会であり、広い範囲の長年に渡ってのデータで種類変化についてみることが出来る点は貴重であると感じました。また伊藤氏はスライドでよく見られるカモメ類の識別点を述べるとともに、近頃発行された「カモメ識別ハンドブック」(文一総合出版)の知見をもとにセグロカモメとニシセグロカモメの亜種の分類についても述べ、この仲間の分類に今後も注意が必要であるとの発表をされました。

一方、叶内拓哉氏は「野鳥の観察と撮影方法について」という題で多くの美しいスライド写真とともに色々な野鳥の観察エピソードを話して下さいました。叶内氏は日本の野鳥

写真家として第一人者であり、多くの図鑑の執筆も行っています。また東京在住ですが新潟県支部の会員でもあります。講演の中では、いつもこういう場では1番いい写真は持ってこないとの話でしたが、見せていただいた写真はどれも素晴らしく、ただ見とれるばかりでした。カメラの絞りやフィルムのことなど撮影の技術的な事柄はもとより、一枚一枚の写真に撮影時のエピソードなどを交えての講演は分かりやすいものでした。撮影にあたっては基本的に動き回って撮ることや巣の写真は撮らないというポリシーとともに細かい観察



野鳥写真家 叶内拓哉氏の特別講習

と経験に基づいた撮影方法が明かされました。以前に造園のお仕事をなさっていたそうで植物に詳しく、一重のウメにメジロ、ヤナギにヒレンジャク、レンゲにキジ・チュウサギ・アマサギなど、どういった植物にいつ頃鳥が来て、なおかつ絵になるかといったことを考えての撮影にプロのノウハウをかいま見た気がしました。また、姿をなかなか見せないヤブサメは、渡来したての2~3日は木の上で鳴くので写真が撮りやすいことやベニアジサシの名前の由来は繁殖期に胸がピンクになるためであるとか、私たちが知らないこともたくさん教えてもらいました。

今回の研究発表は55人の参加者があり大変盛会でした。3人の発表が終わった後に質疑応答が活発になされ、事務局の連絡事項があった後閉会しました。さまざまな知識が深まった研究発表会であったと思います。

インタビューコーナー 編集部 末崎

今回のインタビューは、県支部の研究発表会のために来県された野鳥写真家の叶内拓哉氏にお願いしました。研究発表会の始まる前のわずかな時間にお話をうかがいました。

末崎(以下M)：叶内さんは色々な図鑑の執筆をなさっています。そのお話を聞かせて下さい。

叶内(以下K)：1998年に発行した「山溪ハンディ図鑑 日本の野鳥」(注1)では写真と解説を担当しました。最初は写真だけのはずでしたが、色々事情があって解説と写真の両方担当することになりました。実際に作り始めた頃は、解説文は、今の2倍、写真は3倍あったんですよ。出版社との話し合いの中で大きさがコンパクトになることになって、文は簡単に半分にする訳にもいかないので全部書き直したりしました。

M：あの図鑑は、雄、雌、成鳥、幼鳥などそれぞれの種のバラエティに富んだ写真が多く集めるのが、大変だったのではと思うのですが。

K：全部で2,262点の写真を使っているのですが、9割が自分の写真で、残り1割を他の人にお願しました。自分の写真はだいたいこの鳥なら誰が持っているというようにわかる部分があるので何とかなりましたが、さらにそこから人づてに集めたりもしました。

M：他に図鑑の作成で大変な点はどんな点でしょうか。

K：鳥の学名や英名、分布などはなかなか自分の範囲外の分野なので他の人をお願いしましたが、学名特に属名は人により見解の相違もあるし、当時は日本鳥類目録の第6版も出ていなかったのも、海外の文献もかなりチェックしてもらい大変だったようです。

M：近頃「カモハンドブック」(注2)という図鑑も書かれたようですが、それはどのような意図で書かれたのでしょうか。

K：あの本はいわゆるバードウォッチャー向けではなく、鳥を知らない一般の人達に向けて書きました。今日本には、100箇所くらいハクチョウやカモの餌付けをしている所があるという話で、今日も瓢湖に行ってきたんですが、そういうところに行くと一般の人達はコガモやカイツブリを他のカモの子供や赤ちゃんといっばからないんですよ。私の持論として自然保護はまず知ることが大事という思いがあります。それについて東京の高校で調査してみたことがあって、名前を知らない草花だと踏み付けられるけれども、スマレやタンポポといった有名な花だと踏み付けられなかったという結果が出て、鳥でも名前を知ることその種に対して愛着がわくのではないかと思いであの本を作りました。

M：話は色々変わりますが、鳥の生息という見地から新潟の印象はどうでしょうか。

K：いろんな所へ行くたびによくそういう質問を受けるんですが、それぞれの場所にはそれぞれの良さがあります。北海道には北海道の、また東京などの都会にはそこなりの良さがあるんで一概には言えません。ただ新潟は日本列島が逆のくの字に曲がっているところの要の位置にあり、日本海側を渡る鳥がストップするところという感じです。例えば、南関東や東北ではオオマシコは出ませんが、新潟では見られます。ガン類の越冬地としてもそういう傾向が見られると思います。ただ新潟では猛禽類や山の鳥などの種類はいるんだけども個体数が多いとは思えません。その理由は私にはわかりませんが。

M：最後に月並みの質問で恐縮ですが、叶内さんのお好きな鳥とかはいるんでしょうか。

K：これも必ずと言えるほど聞かれるんですが基本的には全部好きです。しかしその中でもと聞かれると、私はフクロウ類と答えることにしています。基本的には差がないのですがフクロウ類はやはり好きです。かわいいでしょ、目が前にあって、人間く

さい気がして、誰も思うそうでしょう。

M：本日はどうもありがとうございました。

インタビューを終えて

叶内さんは、鳥の世界では有名人で、緊張しながらのインタビューでしたが、私のくだらないと思えるような質問にも気さくに答えて下さいました。この紙面には表すことができなかったのですが、発表前の気ぜわしい時間であったにもかかわらず一つの質問にもかなり細かくていねいに答えていただいて大変恐縮しました。私としては、全国を巡って写真撮影をされるだけでなく、初心者用の図鑑からかなり専門的な図鑑まで執筆される方だという認識が強く、時間が少なかったこともあり、本業の写真のことはほとんどインタビューできませんでした。新潟県支部会員のみなさん特に写真撮影をなさる方には申し訳ありませんでした。

注1:「山溪ハンディ図鑑7 日本の野鳥」写真・解説/叶内拓哉 分布図/阿部直哉 解説(鳴声) /上田秀雄 (山と溪谷社)

写真検索とタイトルの上に書かれているようにいままでの写真図鑑と異なり、1種の解説に雄、雌、夏羽、冬羽、成鳥、幼鳥、など異なるパターンの写真がたくさん使われているのが特徴。479種の鳥の解説に2,262点の写真が使われているばかりでなく、写真の一枚ごとにその写真で示したいポイントの短い解説が書いてある。624ページと厚めだが、コンパクトで野外でも十分使える大きさになっている。

注2:「カモハンドブック」叶内拓哉著(文一総合出版)

日本で記録されたカモ科55種のうち、一般に観察される機会のある46種についてアップの写真で取り上げてある。また一般の人がカモと誤解しやすいアヒルやガチョウ類さらには、カイツブリ、バン、オオバン、カワウについてもふれている。識別しにくいカモ類の雌の

比較やハクチョウ類の顔の比較、さらにはカモ類の交雑個体等の写真まであり、解説文はベテランの方々も使用できる内容になっている。66ページと薄く、コンパクトで野外向きの図鑑である。

コーヒーブレイク

古切手の中の鳥たち

新潟市 千葉 晃

野外で鳥の姿や声を楽しみ、風の音や草木の匂いを体全身で感じる時、私はつくづく幸せだと思う。阿賀野川下流の堤防を車で通り過ぎながら、ゆったり流れる川面と遠く霞む五頭や飯豊の山並みを眺める時も何か満ち足りた気持ちになる。会員の皆さんは、鳥だけでなく鳥と関係あるものに広く興味をもち、登山や自然の中の散策が大好き好きだろ独り合点している。だから、絵や切手や焼き物などを見ても、「そこ」に鳥がいると、つい目を留めてしまうのではないかと…。私はしばしば外国から郵便物をもらうが、切手に鳥や他の生き物の絵柄があるとつい惹かれ剥がし取り机の片隅に保存してしまう妙な癖がある。ロシア科学アカデミーカムチャツカ生態研究所のニコライ・ゲラシモフ博士はよく知られた「鳥類の切手収集家」と聞いているが、そのような特別な収集心はない。私の場合は「ただ、捨てずに取っておく派」の一人である。古切手の絵柄を見ながら、外国へ探鳥に出かけた気分になり、各国の「野鳥に寄せる関心」や「野鳥に関する文化」などを垣間見て楽しんでいる。ニュージーランドやオーストラリアの切手には、その国を代表する野鳥、特に

絶滅危惧種などが取り上げられ、切手を通じて自然保護を訴えている様子がよくわかる。一方、アラブ首長国連邦の切手にはハヤブサがしばしば取り上げられ、男のたしなみとしては「鷹狩り」を宣伝する絵柄となっている様子を感じられる。また、韓国の切手にはツルクイナが、そして中東（国名は不明）の切手にはノガンが印刷されており、その国々の鳥相の一端を表わしているようで興味深い。

皆さんも時にコーヒーブレイクとして、切手を通したバードウォッチングはいかがでしょうか？（物好きバードウォッチャーより）



発行 2001年3月31日 No.51

発行人 大島 基 編集者 小林成光、末崎 朗、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒951-8116 新潟市東中通1番町86番地28

TEL 025-229-2018 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002